

Linux 版 VMware View Client の使用

2012 年 9 月

Linux 版 View Client

このドキュメントは新しいエディションに置き換わるまで、ここで書いてある各製品と後続のすべてのバージョンをサポートします。このドキュメントの最新版をチェックするには、<http://www.vmware.com/jp/support/pubs> を参照してください。

JA-000780-02

vmware[®]

最新の技術ドキュメントは VMware の Web サイト (<http://www.vmware.com/jp/support/>) にあります
VMware の Web サイトでは最新の製品アップデートも提供されています。

このドキュメントに関するご意見およびご感想がある場合は、docfeedback@vmware.com までお送りください。

Copyright © 2012 VMware, Inc. 無断転載を禁ず。本製品は、米国著作権法および米国知的財産法ならびに国際著作権法および国際知的財産法により保護されています。VMware 製品には、<http://www.vmware.com/go/patents-jp> に列記されている 1 つ以上の特許が適用されます。

VMware は、米国およびその他の地域における VMware, Inc. の登録商標または商標です。他のすべての名称ならびに製品についての商標は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

VMware, Inc.
3401 Hillview Ave.
Palo Alto, CA 94304
www.vmware.com

ヴァイムウェア株式会社
105-0013 東京都港区浜松町 1-30-5
浜松町スクエア 13F
www.vmware.com/jp

目次

- 1 Linux 版 VMware View Client の使用 5
- 2 システム要件およびインストール 7
 - Linux クライアントのシステム要件 7
 - サポートされている View デスクトップのオペレーティング システム 8
 - View Client 向けの View 接続サーバの準備 8
 - Linux 版 View Client のインストール 9
- 3 エンド ユーザー用に View Client を構成 11
 - URI を使用して View Client を設定 11
 - View Client コマンドライン インターフェイスおよび構成ファイルの使用 15
 - クライアントでの FIPS モードの有効化 22
 - PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシュの構成 23
- 4 サーバ接続とデスクトップの管理 25
 - 初回の View デスクトップへのログイン 25
 - View Client の証明書チェック モード 27
 - デスクトップの切り替え 28
 - デスクトップからのログオフまたは切断 28
 - デスクトップのロールバック 29
- 5 Linux システムでの Microsoft Windows デスクトップの使用 31
 - 機能サポート一覧 31
 - 国際化 32
 - キーボードとモニタ 32
 - テキストのコピー アンド ペースト 33
- 6 View Client のトラブルシューティング 35
 - デスクトップのリセット 35
 - View Client のアンインストール 35
- 7 Client で USB リダイレクトを設定 37
 - USB 構成プロパティを設定 37
 - USB デバイス ファミリ 40
 - View Client 1.5 コマンドライン オプションを使用して、USB デバイスをリダイレクト 41
- インデックス 43

Linux 版 VMware View Client の使用

このガイド『Linux 版 VMware View Client の使用』では、データセンター内の View デスクトップに接続するために、Linux クライアントシステムに VMware View™ ソフトウェアをインストールして使用方法について説明します。

このドキュメントには、Linux 版 View Client をインストールおよび使用するためのシステム要件と手順が記載されています。

この情報は、Linux クライアントシステムを含む VMware View の配置を設定する必要がある管理者を対象としています。これらの情報は、仮想マシン テクノロジーおよびデータセンターの運用に精通している経験豊富なシステム管理者向けに記述されています。

注意 このドキュメントは、VMware が Ubuntu 用に提供している Linux 版 View Client も対象としています。また、VMware のパートナー数社が、VMware View の展開用のシンクライアント デバイスを提供しています。各シンクライアント デバイスで使用可能な機能およびサポート対象のオペレーティング システムは、ベンダーおよびモデルと、企業が採用する構成によって決定されます。シンクライアント デバイスのベンダーおよびモデルの詳細については、VMware Web サイトから入手可能な『[VMware 互換性ガイド](#)』（英語版）を参照してください。

システム要件およびインストール

クライアントシステムは、一定のハードウェアおよびソフトウェア要件を満たす必要があります。View Client のインストール手順は、他の多くのアプリケーションのインストールと同じです。

- [Linux クライアントのシステム要件 \(P. 7\)](#)
Linux 版 View Client は、Ubuntu Linux 10.04 または 12.04 オペレーティングシステムを使用する PC にインストールできます。
- [サポートされている View デスクトップのオペレーティングシステム \(P. 8\)](#)
管理者は、ゲスト オペレーティングシステムを使用して仮想マシンを作成し、そのゲスト オペレーティングシステムに View Agent をインストールします。エンドユーザーは、クライアント デバイスからこれらの仮想マシンにログインできます。
- [View Client 向けの View 接続サーバの準備 \(P. 8\)](#)
エンドユーザーが View デスクトップに接続できるようにするには、特定のタスクを管理者が実行する必要があります。
- [Linux 版 View Client のインストール \(P. 9\)](#)
エンドユーザーは、View Client を開いて物理マシンから仮想デスクトップに接続します。Linux 版 View Client は Ubuntu 10.04 または 12.04 システムで動作し、Synaptic Package Manager を使用してインストールします。

Linux クライアントのシステム要件

Linux 版 View Client は、Ubuntu Linux 10.04 または 12.04 オペレーティングシステムを使用する PC にインストールできます。

View Client をインストールする Linux PC またはノート PC とその周辺機器は、一定のシステム要件を満たしている必要があります。

モデル	Intel ベースのデスクトップまたはノート PC
メモリ	最小で 2GB の RAM
オペレーティングシステム	View Client 1.6:32 ビット Ubuntu Linux 10.04 または 12.04 View Client 1.5:32 ビット Ubuntu Linux 10.04 または 10.10
View 接続サーバ、セキュリティ サーバ、および View Agent	4.6.1 以降のバージョン 企業のファイアウォールの外部からクライアントシステムが接続する場合には、セキュリティ サーバを使用することを推奨します。セキュリティ サーバでは、クライアントシステムで VPN 接続が必要にはなりません。
VMware View の表示プロトコル	PCoIP または RDP

PCoIP のハードウェア要件

- SSE2 拡張命令に対応する x86 ベースのプロセッサ。800MHz 以上のプロセッサ処理速度。

- さまざまなモニタ セットアップをサポートするための、システム要件を超える RAM 空き容量。一般的なガイドとして次の式を使用してください。

$$20\text{MB} + (24 * (\# \text{ monitors}) * (\text{monitor width}) * (\text{monitor height}))$$

大まかなガイドとして、次の計算が使用できます。

- 1 monitor:1600 x 1200:64MB
- 2 台のモニタの場合:1600 x 1200:128MB
- 3 台のモニタの場合:1600 x 1200:256MB

RDP のハードウェア要件

- SSE2 拡張命令に対応する x86 ベースのプロセッサ。800MHz 以上のプロセッサ処理速度。

- 128MB RAM。

サポートされている View デスクトップのオペレーティング システム

管理者は、ゲスト オペレーティング システムを使用して仮想マシンを作成し、そのゲスト オペレーティング システムに View Agent をインストールします。エンド ユーザーは、クライアント デバイスからこれらの仮想マシンにログインできます。

サポートされているゲスト オペレーティング システムの一覧については、VMware View 4.6.x または 5.x のインストール ドキュメントの「View Agent でサポートされるオペレーティング システム」を参照してください。

View Client 向けの View 接続サーバの準備

エンド ユーザーが View デスクトップに接続できるようにするには、特定のタスクを管理者が実行する必要があります。

エンド ユーザーが View 接続サーバまたはセキュリティ サーバに接続して、View デスクトップにアクセスできるようになるには、プールの設定およびセキュリティの設定を構成する必要があります。

- セキュリティ サーバを使用している場合、VMware では、View 接続サーバ 4.6.1 以降および View セキュリティ サーバ 4.6.1 以降の使用を確認することを推奨しています。View 4.6 以降の『VMware View インストール ガイド』を参照してください。
- クライアント デバイスに安全なトンネル接続を使用する予定で、その安全な接続が View 接続サーバまたはセキュリティ サーバの DNS ホスト名を使用して構成される場合には、この DNS 名がクライアント デバイスによって解決できることを確認します。

安全なトンネルを有効または無効にするには、View 管理者で [View 接続サーバ設定の編集] ダイアログ ボックスに移動して、[デスクトップへの安全なトンネル接続を使用する] チェックボックスを使用します。

- 仮想デスクトップ プールが作成済みであること、および使用予定のユーザー アカウントにこの View デスクトップへのアクセス権が付与されていることを確認します。デスクトップ プールの作成については、『VMware View 管理ガイド』を参照してください。
- View Client で、RSA SecurID または RADIUS 認証などの 2 要素認証を使用するには、View 接続サーバでこの機能を有効にする必要があります。RADIUS 認証は、View 5.1 以降の View 接続サーバで使用できます。詳細については、『VMware View 管理者ガイド』で 2 要素認証に関するトピックを参照してください。

Linux 版 View Client のインストール

エンドユーザーは、View Client を開いて物理マシンから仮想デスクトップに接続します。Linux 版 View Client は Ubuntu 10.04 または 12.04 システムで動作し、Synaptic Package Manager を使用してインストールします。

開始する前に

- クライアントシステムがサポートされているオペレーティングシステムを使用していることを確認します。[「Linux クライアントのシステム要件 \(P. 7\)」](#) を参照してください。
- クライアントシステムに管理者としてログインできることを確認します。
- RDP 表示プロトコルを使用して View デスクトップに接続することを計画している場合は、適切な RDP クライアントがインストールされていることを確認してください。[「Linux クライアントのシステム要件 \(P. 7\)」](#) を参照してください。

手順

- 1 Linux ノート PC または PC で、[Canonical Partners] を有効にします。
 - a Ubuntu のメニュー バーで [システム] - [システム管理] - [アップデート・マネージャ] を選択します。
 - b [設定...] ボタンをクリックし、パスワードを入力して管理タスクを実行します。
 - c [ソフトウェア・ソース] ダイアログ ボックスで、[他のソフトウェア] タブをクリックして、[Canonical のパートナー] チェック ボックスを選択し、Canonical がパートナー向けにパッケージングしているソフトウェアのアーカイブを選択します。
 - d [閉じる] をクリックし、手順に従ってパッケージ リストを更新します。
- 2 Ubuntu のメニュー バーで [システム] - [システム管理] - [Synaptic パッケージマネージャ] を選択します。
- 3 [検索] をクリックして、「**vmware**」を検索します。
- 4 表示されるパッケージのリストで、[vmware-view-client] の横にあるチェック ボックスを選択して、[インストール指定] を選択します。

開いているクライアントのチェック ボックスは選択しないでください。
- 5 ツールバーで [適用] をクリックします。

Linux 版 VMware View Client がインストールされます。
- 6 正しくインストールされたことを確認するには、[VMware View] アプリケーションのアイコンが [アプリケーション] - [インターネット] メニューに表示されていることを確認します。

次に進む前に

View Client を開始して、正しい仮想デスクトップにログインできることを確認します。[「初回の View デスクトップへのログイン \(P. 25\)」](#) を参照してください。

エンド ユーザー用に View Client を構成

View Client は、エンド ユーザー用にログインおよびデスクトップ選択エクスペリエンスを簡素化するために複数の設定メカニズムを提供していますが、セキュリティ ポリシも強制します。

この章では次のトピックについて説明します。

- [URI を使用して View Client を設定 \(P. 11\)](#)
- [View Client コマンドライン インターフェイスおよび構成ファイルの使用 \(P. 15\)](#)
- [クライアントでの FIPS モードの有効化 \(P. 22\)](#)
- [PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシュの構成 \(P. 23\)](#)

URI を使用して View Client を設定

uniform resource identifiers (URI) を使用して、View Client を起動するためにエンド ユーザーがクリックするリンク付きの Web ページまたは電子メールを作成し、View 接続サーバに接続し、特定の設定オプションで固有のデスクトップを起動できます。

View Client 1.6 以降では、エンド ユーザー用の Web または電子メールのリンクを作成することで、View デスクトップへのログイン プロセスを簡素化できます。部分的または以下のすべての情報を提供する URI を作成することでこれらのリンクを作成すれば、エンド ユーザーは入力する必要がありません:

- View 接続サーバ のアドレス
- View 接続サーバ のポート番号
- Active Directory ユーザー名
- ドメイン名
- デスクトップ表示名
- ウィンドウ サイズ
- リセット、ログオフ、およびロール バックを含むデスクトップ アクション
- 表示プロトコル

URI を作成するには、View Client 固有のパスおよびクエリ部分と共に `vmware-view` URI スキーマを使用します。

注意 View Client が既にエンド ユーザーのクライアント コンピュータにインストールされている場合に限って、URI を使用して View Client を起動できます。

vmware-view URI を作成するための構文

構文には、**vmware-view** URI スキーム、デスクトップを指定するためのパス部分、そしてオプションでデスクトップのアクションまたは構成オプションを指定するためのクエリが含まれます。

VMware View URI の仕様

URI を作成する場合、基本的に引数として完全な View URI 文字列で **vmware-view** を呼び出します。

以下の構文を使用して View Client を起動するための URI を作成します:

```
vmware-view://[<authority-part>][/<path-part>][?<query-part>]
```

必要となる唯一の要素は URI スキーム **vmware-view** です。一部のクライアント OS のバージョンによっては、スキーマ名は大文字と小文字の区別があります。したがって、**vmware-view** を使用してください。

重要 すべての部分で、非 ASCII 文字は UTF-8 [STD63] に基づいて最初にエンコードされる必要があり、次に対応する UTF-8 シーケンスの各オクテットは、URI 文字として表されるパーセントでエンコードされる必要があります。

ASCII 文字のエンコードについての詳細は、http://www.w3schools.com/tags/ref_urlencode.asp の URL エンコーディング資料を参照してください。

<authority-part>

サーバアドレス、オプションでユーザー名、非デフォルトポート番号、またはその両方を指定します。サーバ名は、DNS 構文に一致する必要があります。

ユーザー名を指定するには、以下の構文を使用します:

```
user1@<server-address>
```

ドメインが含まれる UPN アドレスを指定できません。ドメインを指定するには、URI で **domainName** クエリ部分を使用できます。

ポート番号を指定するには、以下の構文を使用します:

```
<server-address>:<port-number>
```

<path-part>

デスクトップを指定します。デスクトップ表示名を使用します。表示名にスペースが含まれている場合、**%20** エンコーディング機能を使用してスペースを表します。

<query-part>

使用するための設定オプション、または実行するデスクトップアクションを指定します。クエリは大文字と小文字の区別がありません。複数のクエリを使用するには、クエリの間アンパサンド (&) を使用します。クエリが違いに競合する場合、リストの最後のクエリが使用されます。次の構文を使用します:

```
<query1>=<value1> [&<query2>=<value2>...]
```

サポートされるクエリ

このトピックは、View Client のこのタイプでサポートされるクエリをリストします。デスクトップクライアントやモバイルクライアントなどの複数のクライアントタイプ用に URI を作成する場合は、クライアントシステムの各タイプの『VMware View Client の使用』を参照してください。

アクション

表 3-1. アクション クエリで使用できる値

値	説明
参照	指定したサーバにホストされている使用可能なデスクトップのリストを表示します。このアクションを使用している場合、デスクトップを指定する必要はありません。
スタート セッション	指定したデスクトップを起動します。アクションクエリが提供されず、デスクトップ名が提供されなければ、 スタート セッション がデフォルトアクションとなります。
リセット	指定したデスクトップをシャットダウンして再起動します。保存されていないデータは失われます。View デスクトップのリセットは、物理 PC のリセット ボタンを押すのと同じです。
ログオフ	View デスクトップのゲスト OS からユーザーがログオフします。
ロールバック	Windows PC またはノートパソコンのローカル モードを使用するためにチェックアウト中に、指定したデスクトップに行った変更を取り消します。

connectUSBOnInsert

(USB コンポーネントは、サードパーティ ベンダから入手できる View Client にも含まれます。)デバイスに接続した時に前面のデスクトップに USB デバイスを接続します。このクエリは、**unattended** クエリを指定している場合に暗黙的に設定されます。このクエリを使用するには、**action** クエリを **start-session** に設定する必要があります。さもないと、**action** クエリを持ちません。有効な値は、**Yes** および **No** です。構文の例は、**connectUSBOnInsert=yes** です。

connectUSBOnStartup

(USB コンポーネントは、サードパーティ ベンダから入手できる View Client にも含まれます。)すべての USB デバイスをクライアントシステムに現在接続されているデスクトップにリダイレクトします。このクエリは、**unattended** クエリを指定している場合に暗黙的に設定されます。このクエリを使用するには、**action** クエリを **start-session** に設定する必要があります。さもないと、**action** クエリを持ちません。有効な値は、**Yes** および **No** です。構文の例は、**connectUSBOnStartup=yes** です。

desktopLayout

View デスクトップを表示するウィンドウのサイズを設定します。このクエリを使用するには、**action** クエリを **start-session** に設定する必要があります。さもないと、**action** クエリを持ちません。

表 3-2. desktopLayout クエリの有効値

値	説明
fullscreen	1 台のモニターでフル画面。これはデフォルトです。
multimonitor	すべてのモニターでフル画面。
windowLarge	大きなウィンドウ。
windowSmall	小さなウィンドウ。
<W>x<H>	カスタム解像度で、幅と高さをピクセルで指定します。構文の例は、 desktopLayout=1280x800 です。

desktopProtocol	有効な値は、 RDP および PCoIP です。たとえば、PCoIP を指定するには、 desktopProtocol=PCoIP 構文を使用します。
domainName	View デスクトップに接続しているユーザーに関連づけられるドメイン。

vmware-view URI の例

vmware-view URI スキームでハイパーテキスト リンクまたはボタンを作成し、電子メールや Web ページにこれらのリンクを含めることができます。エンド ユーザーがこれらのリンク先をクリックして、たとえば、指定する起動オプションで特定の View デスクトップを起動できます。

URI 構文の例

各 URI 例は、URI リンクをクリック後にエンド ユーザーに表示される説明に続きます。

1 vmware-view://view.mycompany.com/Primary%20Desktop?action=start-session

View Client が起動され、**view.mycompany.com** サーバに接続します。ログイン ボックスが表示され、ユーザーにユーザー名、ドメイン名、およびパスワード入力を求めます。ログインが成功すれば、クライアントは [プライマリ デスクトップ] と表示されるデスクトップに接続し、ユーザーはゲスト OS にログインされます。

注意 デフォルトの表示プロトコルおよびウィンドウ サイズが使用されます。デフォルトの表示プロトコルは PCoIP です。デフォルトのウィンドウ サイズはフル画面です。

デフォルトは変更できます。[\[View Client コマンドライン インターフェイスおよび構成ファイルの使用 \(P. 15\)\]](#) を参照してください。

2 vmware-view://view.mycompany.com:7555/Primary%20Desktop

この URI は、View View 接続サーバに 7555 の非デフォルト ポートを使用することを除いて以前の例と同じ効果を持ちます。(デフォルト ポートは 443 です。)デスクトップ ID が提供されているので、デスクトップは **start-session** アクションが URI に含まれていなくとも起動されます。

3 vmware-view://fred@view.mycompany.com/Finance%20Desktop?desktopProtocol=PcoIP

View Client が起動され、**view.mycompany.com** サーバに接続します。ログイン ボックスで、[ユーザー名] テキスト ボックスが [fred] という名前で設定されます。ユーザーはドメイン名とパスワードを入力する必要があります。ログインが成功すれば、クライアントは [ファイナンス デスクトップ] と表示されるデスクトップに接続し、ユーザーはゲスト OS にログインされます。この接続では PCoIP 表示プロトコルが使用されます。

4 vmware-view://fred@view.mycompany.com/Finance%20Desktop?domainName=mycompany

View Client が起動され、**view.mycompany.com** サーバに接続します。ログイン ボックスで、[ユーザー名] テキスト ボックスが [fred] という名前で設定され、[ドメイン] テキスト ボックスは [mycompany] で設定されます。ユーザーはパスワードだけ入力する必要があります。ログインが成功すれば、クライアントは [ファイナンス デスクトップ] と表示されるデスクトップに接続し、ユーザーはゲスト OS にログインされます。

5 vmware-view://view.mycompany.com/

View Client が起動され、ユーザーは **view.mycompany.com** サーバに接続するためのログイン入力が求められます。

6 vmware-view://view.mycompany.com/Primary%20Desktop?action=reset

View Client が起動され、**view.mycompany.com** サーバに接続します。ログイン ボックスが表示され、ユーザーにユーザー名、ドメイン名、およびパスワード入力を求めます。ログインが成功すれば、View Client はダイアログ ボックスを表示して、プライマリ デスクトップのリセット操作の確認をユーザーに求めます。リセットが行われると、View Client のタイプに基づいて、ユーザーにリセットが成功したかどうかを示すメッセージが表示されます。

注意 このアクションは、View 管理者がエンド ユーザーにこの機能を有効にしている場合に限り使用されます。

7 vmware-view://

View Client が起動され、View 接続サーバインスタンスのアドレスを入力するためのページに入ります。

HTML コードの例

URI を使用して、ハイパーテキストリンクおよびボタンを電子メールまたは Web ページに組み込むことができます。以下の例は、最初の URI の例から URI を使用して [Test Link] というハイパーリンクおよび [TestButton] というボタンをコーディングする方法です。

```
<html>
<body>

<a href="vmware-view://view.mycompany.com/Primary%20Desktop?action=start-session">Text Link</a><br>

<form><input type="button" value="TestButton" onClick="window.location.href='vmware-view://view.mycompany.com/Primary%20Desktop?action=start-session'"></form>
<br>

</body>
</html>
```

View Client コマンドライン インターフェイスおよび構成ファイルの使用

コマンドラインのオプションまたはそのオプションに相当する構成ファイルのプロパティを使用して、View Client を構成できます。

vmware-view コマンドライン インターフェイスを使用するか、構成ファイルのプロパティを設定して、View Client でユーザーに表示するデフォルト値を定義したり、ユーザーに情報の確認を求めるいくつかのダイアログボックスを表示しないようにできます。また、ユーザーに変更させない設定を指定することもできます。

構成設定の処理順序

View Client が起動するときに、構成設定は、次の順序で各種の場所で処理されます。

- 1 /etc/vmware/view-default-config
- 2 ~/.vmware/view-preferences
- 3 コマンドライン引数
- 4 /etc/vmware/view-mandatory-config

設定が複数の場所で定義されている場合、使用される値は、読み取られた最後のファイルまたはコマンドライン オプションの値になります。たとえば、ユーザー設定より優先される設定を指定するには、**/etc/vmware/view-mandatory-config** ファイルでプロパティを設定します。

ユーザーが変更できるデフォルト値を設定するには、**/etc/vmware/view-default-config** ファイルを使用します。ユーザーが設定を変更した後、View Client を終了すると、変更された設定は **~/.vmware/view-preferences** ファイルに保存されます。

ユーザーがデフォルト値を変更できないようにするプロパティ

各プロパティについて、ユーザーにこの設定の変更を許可するかどうかを制御する **view.allow** プロパティを設定できます。たとえば、**/etc/vmware/view-mandatory-config** ファイルで **view.allowDefaultBroker** プロパティを "FALSE" に設定すると、ユーザーは View Client を使用するとき [サーバ名] フィールドで名前を変更できなくなります。

コマンドライン インターフェイス使用時の構文

ターミナル ウィンドウで、次の形式の `vmware-view` コマンドを使用します。

```
vmware-view [<command-line-option> [<argument>]] ...
```

デフォルトでは、`vmware-view` コマンドは、`/usr/bin` ディレクトリにあります。

すべてのオプションに短縮形があるわけではありませんが、オプション名の短縮形または長形式のいずれかを使用できます。たとえば、ドメインを指定する場合、`-d` (短縮形) または `--domainName=` (長形式) のいずれかを使用できます。長形式を使用することを選択すると、ユーザーにとってスクリプトが読みやすくなる場合があります。

`--help` オプションを使用して、コマンドライン オプションのリストと使用方法の情報を取得できます。

重要 プロキシを使用する必要がある場合は、以下の構文を使用します：

```
http_proxy=<proxy_server_URL:port> https_proxy=<proxy_server_URL:port> vmware-view
<options>
```

以前、このプロキシ用に設定された環境変数をクリアする必要があるため、この回避策は必要です。このアクションを実行しない場合、プロキシ例外設定が View Client 内で有効になりません。View 接続サーバインスタンス用のプロキシ例外を構成します。

View Client 構成設定とコマンドライン オプション

便宜性を図るために、ほぼすべての構成設定に、`<key>=<value>` プロパティとそれに相当するコマンドライン オプション名の両方が存在します。いくつかの設定については、コマンドライン オプションは存在し、構成ファイルで設定できる相当するプロパティは存在しない場合があります。その他のいくつかの設定については、コマンドライン オプションが利用できない場合があり、プロパティを設定する必要があります。

重要 USB リダイレクトや MMR 用などのコマンドライン オプションと構成キーの一部は、サードパーティのベンダーより提供される View Client のバージョンでのみで利用可能です。これらのパートナーの詳細については [\[VMware 互換性ガイド\]](#) を参照してください。

表 3-3. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー

構成キー	コマンドライン オプション	説明
<code>view.allMonitors</code>	<code>--allmonitors</code>	View Client が起動された時に接続されるすべてのモニターで、ホスト OS を非表示にし、View Client ユーザー インターフェイスをフル スクリーン モードで開きます。 構成キーを設定している場合には、" TRUE " または " FALSE " を指定します。デフォルトは " FALSE " です。
<code>view.allowDefaultBroker</code>	<code>-l, --lockServer</code> 例： <code>--lockServer -s view.company.com</code>	このコマンドライン オプションを使用するか、プロパティを " FALSE " に設定すると、クライアントがこれまでどのサーバにも接続したことなく、コマンドラインや設定ファイルでサーバアドレスが指定されていない場合を除いて、[サーバ名] フィールドが無効になります。

表 3-3. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
<code>view.autoConnectBroker</code>	なし	<p><code>view.defaultBroker</code> 構成プロパティが設定されていない、または <code>--serverURL=</code> コマンドライン オプションが使用されていない限り、最後に使用された View server に自動的に接続します。</p> <p>"TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。</p> <p>このプロパティと <code>view.autoConnectDesktop</code> プロパティを "TRUE" に設定することは、<code>view.nonInteractive</code> プロパティを "TRUE" に設定することと同じです。</p>
<code>view.autoConnectDesktop</code>	なし	<p><code>view.defaultDesktop</code> 構成プロパティが設定されていない、または <code>--desktopName=</code> コマンドライン オプションが使用されていない限り、最後に使用された View デスクトップに自動的に接続します。</p> <p>"TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。</p> <p>このプロパティと <code>view.autoConnectBroker</code> プロパティを "TRUE" に設定することは、<code>view.nonInteractive</code> プロパティを "TRUE" に設定することと同じです。</p>
<code>view.defaultBroker</code>	<code>-s, --serverURL=</code> 例： <code>--</code> <code>serverURL=https://view.company.com</code> <code>-s view.company.com</code> <code>--serverURL=view.company.com:1443</code>	<p>View Client の [サーバ名] フィールドに指定する名前を追加します。完全修飾のドメイン名を指定します。デフォルトのポート番号 443 を使用しない場合には、ポート番号も指定できます。デフォルトは、直近で使用された値になります。</p>
<code>view.defaultDesktop</code>	<code>-n, --desktopName=</code>	<p><code>autoConnectDesktop</code> が "TRUE" に設定され、ユーザーが複数のデスクトップにアクセス可能である場合に、どのデスクトップを使用するかを指定します。</p> <p>これは、[デスクトップの選択] ダイアログボックスに表示される名前です。この名前は、通常はプール名です。</p>
<code>view.defaultDesktopHeight</code>	なし	<p>View デスクトップのウィンドウのデフォルトの高さをピクセルで指定します。</p>

表 3-3. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
view.defaultDesktopSize	--desktopSize= 例： --desktopSize="1280x800" --desktopSize="all"	<p>View デスクトップのウィンドウのデフォルトのサイズを設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ すべてのモニタを使用するには、このプロパティを "1" に設定するか、コマンドライン引数 "all" を使用します。 ■ 1つのモニタでフルスクリーンモードを使用するには、このプロパティを "2" に設定するか、コマンドライン引数 "full" を使用します。 ■ 大きなウィンドウを使用するには、このプロパティを "3" に設定するか、コマンドライン引数 "large" を使用します。 ■ 小さなウィンドウを使用するには、このプロパティを "4" に設定するか、コマンドライン引数 "small" を使用します。 ■ カスタムサイズを設定するには、このプロパティを "5" に設定してから、view.defaultDesktopWidth および view.defaultDesktopHeight プロパティも設定します。あるいは、コマンドラインで "<width>x<height>" として、幅と高さをピクセル数で指定します。
view.defaultDesktopWidth	なし	View デスクトップのウィンドウのデフォルトの幅をピクセルで指定します。
view.defaultDomain	-d, --domainName=	すべての接続について View Client が使用するドメイン名を設定し、View Client の認証ダイアログボックスの [ドメイン名] フィールドにこのドメイン名を追加します。
view.defaultPassword	-p "-", --password="-"	<p>常に "-" を指定し、stdin からパスワードを読み取ります。</p> <p>View Client がすべての接続について使用するパスワードを設定し、View 接続サーバがパスワード認証に対応している場合、View Client の認証ダイアログボックスの [パスワード] フィールドにこのパスワードを追加します。</p> <p>注意 パスワードを空白にすることはできません。これは、--password="" と指定できないということです。</p>
view.defaultProtocol	--protocol=	<p>使用する表示プロトコルを指定します。"PCOIP" または "RDP" を指定します。この値は、大文字と小文字の区別があります。たとえば、rdp と入力すると、使用されたプロトコルがデフォルトとなります。デフォルトは、プールの設定の下の View 管理者で指定された設定です。</p>
view.defaultUser	-u, --userName=	<p>すべての接続について View Client が使用するユーザー名を設定し、View Client の認証ダイアログボックスの [ユーザー名] フィールドに指定するユーザー名を追加します。</p> <p>キオスクモードでは、アカウント名をクライアントの MAC アドレスを基準にすることができます。また、custom- のような認識されているプリフィックス文字列から開始することもできます。</p>

表 3-3. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
<code>view.fullScreen</code>	<code>--fullscreen</code>	ホスト OS を非表示にして、1 台のモニターで View Client ユーザー インターフェイスをフルスクリーン モードで開きます。このオプションは、デスクトップ セッションのスクリーン モードには影響しません。 構成キーを設定している場合には、 "TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。
<code>view.kbdLayout</code>	<code>-k, --kbdLayout=</code> 例： <code>--kbdLayout="en-us"</code> <code>-k "fr"</code>	キーボード レイアウトで使用する言語を言語 コードで指定します。
<code>view.kioskLogin</code>	<code>--kioskLogin</code> 例：[例: キオスク モードの例 (P. 21)] を参照してください。	View クライアントがキオスク モード アカウントを使用して認証することを指定します。 構成キーを設定している場合には、 "TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。
<code>view.mmrPath</code>	<code>-m, --mmrPath=</code> 例： <code>--mmrPath="/usr/lib/altmmr"</code>	(サードパーティのベンダーからの配布でのみ入手可能) パスを Wyse MMR (マルチメディアリダイレクト) ライブラリがあるディレクトリに指定します。
<code>view.nomenubar</code>	<code>--nomenubar</code>	View Client がフルスクリーン モードになっている場合に View Client メニューバーを表示せず、ユーザーが View デスクトップからログオフ、リセット、切断するためのメニュー オプションにアクセスできないようにします。キオスク モードを構成するときには、このオプションを使用します。 構成キーを設定している場合には、 "TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。
<code>view.nonInteractive</code>	<code>-q, --nonInteractive</code> 例： <code>--nonInteractive</code> <code>--serverURL="https://view.company.com"</code> <code>--userName="user1" --password="-"</code> <code>--domainName="xyz"</code> <code>--desktopName="Windows 7"</code>	コマンドラインや構成プロパティで指定された画面をスキップして、エンドユーザーに不要な UI 手順を表示しないようにします。 構成キーを設定している場合には、 "TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。 このプロパティを "TRUE" に設定することは <code>view.autoConnectBroker</code> と <code>view.autoConnectDesktop</code> プロパティを "TRUE" に設定することと同じです。

表 3-3. View Client のコマンドライン オプションと構成ファイル キー (続き)

構成キー	コマンドライン オプション	説明
view.once	---once	<p>エラーが発生した場合に View Client が接続を再試行しないことを指定します。</p> <p>View 4.6 クライアントに対する類似のワークフローの入手を希望する場合、---once を使用します。このオプションにより、ユーザーがデスクトップからの接続を切断またはログ オフした後、View クライアントが強制終了となります。</p> <p>キオスク モードを使用している場合、通常はこのオプションを指定し、終了コードを使用してエラーを処理することをお勧めします。指定しない場合、vmware-view プロセスをリモートから強制終了することが難しい場合があります。</p> <p>構成キーを設定している場合には、"TRUE" または "FALSE" を指定します。デフォルトは "FALSE" です。</p>
view.rdesktopOptions	--rdesktopOptions= 例： --rdesktopOptions="--f -m"	<p>(Microsoft RDP 表示プロトコルを使用している場合に利用可能) rdesktop アプリケーションに転送するコマンドライン オプションを指定します。rdesktop オプションの詳細については、rdesktop のドキュメントを参照してください。</p>
なし	--r, --redirect= 例： --redirect="sound:off"	<p>(Microsoft RDP 表示プロトコルを使用している場合に利用可能) rdesktop が View デスクトップにリダイレクトするローカル デバイスを指定します。</p> <p>rdesktop の --r オプションに渡すデバイス情報を指定します。1 つのコマンドで複数のデバイス オプションを設定できます。</p>
view.sslVerificationMode	なし	<p>サーバ証明書検証モードを設定します。</p> <p>証明書の検証確認のいずれかが失敗した場合に接続を拒否するには、"1" を、警告するものの自己署名の証明書を使用する接続を許可する場合には "2" を、また、検証できない接続を許可する場合には "3" を指定します。"3" を指定すると、検証確認は実行されません。デフォルトは [2] です。</p>
なし	--printEnvironmentInfo 例： --printEnvironmentInfo --s view.company.com	<p>IP アドレス、MAC アドレス、マシン名、およびドメイン名などクライアント デバイスの環境に関する情報を表示します。</p> <p>キオスク モードでは、MAC アドレスを基準としてクライアントのアカウントを作成できます。MAC アドレスを表示するには、--s オプションと一緒にこのオプションを使用する必要があります。</p>
なし	---usb=	<p>(サードパーティのベンダーからの配布でのみ入手可能で View Client 1.5 限定) USB リダイレクトに使用するオプションを指定します。</p> <p>[View Client 1.5 コマンドライン オプションを使用して、USB デバイスをリダイレクト (P. 41)] を参照してください。</p> <p>View Client 1.6 以降で USB オプションを構成するには、第 7 章 [Client で USB リダイレクトを設定 (P. 37)] を参照してください。</p>
なし	---version	View Client に関するバージョン情報を表示します。

例: キオスク モードの例

キオスク ユーザーには、航空会社のチェックインステーションにいる顧客、教室または図書館にいる学生、医療データ入力ワークステーションにいる医療スタッフ、セルフサービス地点にいる顧客などが含まれます。ユーザーはクライアント デバイスまたは View デスクトップを使用するためにログインする必要がないため、アカウントはユーザーではなく、クライアント デバイスに関連付けられます。ただし引き続き、ユーザーに、一部のアプリケーションでは認証情報を入力するよう求めることもできます。

キオスク モードを設定するには、View 接続サーバインスタンスの **vdmadmin** コマンドライン インターフェイスを使用し、『VMware View 管理者ガイド』のキオスク モードに関する章に記載されているいくつかの手順を実行する必要があります。キオスク モードを設定した後は、Linux クライアントで **vmware-view** コマンドを使用して、キオスク モードで View デスクトップに接続できます。

キオスク モードで Linux クライアントから View デスクトップに接続するには、少なくとも、次の構成キーまたはコマンドライン オプションを追加する必要があります。

構成キー	同等のコマンドライン オプション
view.kioskLogin	--kioskLogin
view.nonInteractive	-q, --nonInteractive
view.fullScreen	--fullscreen
view.nomenubar	--nomenubar
view.defaultBroker	-s, --serverURL=

これらの構成設定の省略は、キオスク モードではサポートされません。View 接続サーバがデフォルトではないキオスク ユーザー名を求めるとして設定されている場合、**view.defaultUser** プロパティも設定するか、**-u** または **--userName=** コマンドライン オプションを使用する必要があります。デフォルト以外のユーザー名が求められず、ユーザー名を指定しない場合は、View Client は、デフォルトのキオスク ユーザー名を取得して使用できます。

注意 **view.sslVerificationMode** 構成キーを設定する場合、このキーは必ず **/etc/vmware/view-mandatory-config** ファイルで設定してください。キオスク モードでクライアントを実行する場合、クライアントは **view-preferences** ファイルを確認しません。

この例に表示されているコマンドは、Linux クライアントシステムで View Client を実行します。また、次の特徴があります。

- ユーザーアカウント名は、クライアントの MAC アドレスを基準とします。
- View Client は、View Client のメニュー バーが表示されないフルスクリーン モードで実行されます。
- ユーザーは、指定された View 接続サーバインスタンスおよび View デスクトップに自動的に接続され、ログイン認証の入力は求められません。
- 接続エラーが発生する場合、戻されるエラー コードによって、スクリプトが実行されるか、キオスク監視プログラムによってエラーが処理される場合があります。たとえば、その結果、クライアントシステムで誤った順序で画面が表示される場合や、View 接続サーバへの再接続が試行されるまである程度の時間を待機する場合があります。

```
./vmware-view --kioskLogin --nonInteractive --once --fullscreen --nomenubar
--serverURL="server.mycompany.com" --userName="CM-00:11:22:33:44:55:66:77" --
password="mypassword"
```

エンドユーザーの証明書確認の構成

たとえば、完全検証を常に実行するように、管理者は証明書検証モードを構成することができます。

証明書確認は、View 接続サーバと View Client 間の SSL 接続に対して実行されます。管理者は検証モードを構成して、以下のいずれかの戦略を使用することができます：

- エンドユーザーは検証モードの選択を許可されています。この一覧の残りでは、3 種類の検証モードについて説明します。
- (検証なし) 証明書の確認は実行されません。
- (警告) 自己署名証明書がサーバによって提出された場合、エンドユーザーは警告を受けます。ユーザーはこの種類の接続を許可するか、しないかを選択できます。
- (フル セキュリティ) 完全な検証を実行し、完全検証に合格しない接続は拒否されます。

各検証確認の詳細については、「[View Client の証明書チェック モード \(P. 27\)](#)」を参照してください。

デフォルトの検証モードを設定するには、`view.sslVerificationMode` プロパティを使用します：

- **1** は、完全検証を実装します。
- **2** は、接続が安全ではない可能性がある場合に警告を実装します。
- **3** は、検証を実行しないを実装します。

エンドユーザーが変更できないようにモードを構成するには、クライアントシステムの `/etc/vmware/view-mandatory-config` ファイルの `view.allowSslVerificationMode` プロパティを「**False**」に設定します。「[View Client 構成設定とコマンドライン オプション \(P. 16\)](#)」を参照してください。

クライアントでの FIPS モードの有効化

クライアントが FIPS (連邦情報処理規格) 140-2 承認済み暗号アルゴリズムとリモート PCoIP 接続を確立するためのプロトコルのみを使うように構成プロパティを設定できます。

この設定はサーバとクライアントの両方に適用されます。一方または両方のエンドポイントを、FIPS モードで動作するように構成できます。FIPS モードで動作するように 1 つのエンドポイントを構成すると、セッション ネゴシエーションに使用できる暗号化アルゴリズムが制限されます。

重要 1 つのエンドポイントで FIPS モードを有効にしても、他のエンドポイントでは FIPS 140-2 承認の暗号アルゴリズムをサポートしない場合は、接続できません。

この設定を無効にするか、構成しない場合は、FIPS モードが使用されます。

構成プロパティの設定

FIPS モードを有効にしたり、無効にするには、`pcoip.enable_fips_mode` プロパティを設定できます。プロパティを **1** FIPS モードをオンにする設定、とプロパティを **0** FIPS モードをオフにする設定。たとえば、以下の設定により FIPS モードはオンになります：

```
pcoip.enable_fips_mode = 1
```

等号 (=) の前後にスペースを入れてください。

このプロパティはどのファイル内でも設定できます。View Client の起動時に、設定は、次の順序で各種の場所で処理されます。

- 1 `/etc/teradici/pcoip_admin_defaults.conf`
- 2 `~/.pcoip.rc`

3 /etc/teradici/pcoip_admin.conf

設定が複数の場所で定義されている場合、使用される値は、読み取られた最後のファイルからの値になります。

PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシュの構成

PCoIP クライアントサイド イメージ キャッシングでは、再送信を回避するためにイメージコンテンツをクライアントに保存します。デフォルトにより、この機能を使用すれば帯域幅の使用が抑えられます。

重要 この機能は、View Agent および View 接続サーバが View 5.0 以降のバージョンである場合のみ使用可能です。

PCoIP イメージ キャッシュは、一時的なものと同様、空間的冗長性をキャプチャします。たとえば、PDF ドキュメントをスクロールダウンすると、ウィンドウの下部から新しいコンテンツが表示され、一番古いコンテンツはウィンドウのトップから表示されなくなります。他のコンテンツはすべて変わらず、上に移動します。PCoIP イメージ キャッシュは、この空間的で時間的な冗長性を検出できます。

スクロールの間、クライアント デバイスに送られたディスプレイ情報は、主として、かなりの大きさの帯域幅を保存するイメージキャッシュを使用しているキャッシュインデックスのシーケンスです。このように効率的なスクロールは、LAN 上、WAN を介する場合のいずれもメリットがあります。

- LAN 上では、帯域幅は比較的制約がありませんが、クライアントサイド イメージ キャッシングを使用しており、かなりの大きさの帯域幅を節約できます。
- WAN を介して、利用可能な帯域幅の制限内に抑えるには、クライアントサイドのキャッシングを使用しなければスクロールのパフォーマンスが低下する場合があります。この場合、クライアントサイドのキャッシングにより帯域幅が節約され、スムーズで高感度のスクロール体験が可能になります。

過去に送信されたディスプレイの一部をクライアントが保存できるように、この機能はデフォルトで有効に設定されています。デフォルトのキャッシュ サイズは 250 MB です。クライアント イメージ キャッシュ サイズは、最低 50 MB から最高 300 MB までのサイズに構成できます。キャッシュ サイズが大きくなればなるほど帯域幅の使用量は減少しますが、クライアント上ではより多くのメモリが必要となります。キャッシュ サイズが小さくなると、必要な帯域幅が増えます。たとえば、メモリの少ないシンクライアントでは必要となるキャッシュ サイズも少なくなります。

構成プロパティの設定

キャッシュ サイズを構成するには、`pcoip.image_cache_size_mb` プロパティを設定します。たとえば、以下の設定ではキャッシュ サイズが 50MB となるように構成されます：

```
pcoip.image_cache_size_mb = 50
```

等号 (=) の前後にスペースを入れてください。50 未満の数を指定すると、50 に変換されます。300 を超える数を設定すると、300 に変換されます。

このプロパティはどのファイル内でも設定できます。View Client の起動時に、設定は、次の順序で各種の場所で処理されます。

- 1 /etc/teradici/pcoip_admin_defaults.conf
- 2 ~/.pcoip.rc
- 3 /etc/teradici/pcoip_admin.conf

設定が複数の場所で定義されている場合、使用される値は、読み取られた最後のファイルからの値になります。

注意 以下のプロパティを設定して、イメージ キャッシュが動作中であるということが視覚的にわかるようにできます。

```
pcoip.show_image_cache_hits = 1
```

この構成を使用すれば、イメージ キャッシュからのイメージ内の各タイル (32 x 32 pixel) に対して、タイルの回りに長方形が表示されます。

サーバ接続とデスクトップの管理

View Client を使用して View 接続サーバまたはセキュリティ サーバに接続し、View デスクトップにログインするか View デスクトップからログオフします。トラブルシューティングする場合にも、割り当てられている View デスクトップをリセットし、チェックアウトしたデスクトップをロールバックできます。

管理者による View デスクトップのポリシーの構成方法によっては、エンド ユーザーはデスクトップで多くの操作を実行できるようになります。

- [初回の View デスクトップへのログイン \(P. 25\)](#)
エンド ユーザーが仮想デスクトップにアクセスする前に、クライアントシステムから仮想デスクトップにログインできることをテストします。
- [View Client の証明書チェック モード \(P. 27\)](#)
管理者は、またときにはエンド ユーザーは、サーバの証明書チェックが失敗した場合にクライアント接続を拒否するかどうかを設定できます。
- [デスクトップの切り替え \(P. 28\)](#)
デスクトップに接続している場合に、別のデスクトップに切り替えることができます。
- [デスクトップからのログオフまたは切断 \(P. 28\)](#)
ログオフせずに View デスクトップから切断すると、アプリケーションは開いたままになります。
- [デスクトップのロールバック \(P. 29\)](#)
ロールバックは、Windows PC またはノートパソコン上のローカル モードでの使用のためにチェックアウトした仮想デスクトップに行った変更を廃棄することになります。

初回の View デスクトップへのログイン

エンド ユーザーが仮想デスクトップにアクセスする前に、クライアントシステムから仮想デスクトップにログインできることをテストします。

開始する前に

- Active Directory ユーザー名とパスワード、RSA SecurID ユーザー名とパスコード、RADIUS 認証ユーザー名とパスコードなどのログインに必要な認証情報を取得します。
- ログイン用のドメイン名を取得します。
- 管理タスクの実行については以下で説明しています。 [[View Client 向けの View 接続サーバの準備 \(P. 8\)](#)] .
- 社内ネットワークの外部から接続し、仮想デスクトップへのアクセスにセキュリティ サーバを使用していない場合、使用しているクライアント デバイスが VPN 接続を使用していることを確認し、この接続をオンにします。

重要 VMware では、VPN よりもセキュリティ サーバの使用を推奨しています。

- 仮想デスクトップへのアクセスを提供する サーバの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を用意していることを確認してください。ポート番号が 443 ではない場合は、ポート番号も必要です。
- RDP 表示プロトコルを使用して View デスクトップの接続を計画している場合は、AllowDirectRDP View Agent グループ ポリシーが有効であることを確認してください。
- 管理者が許可している場合、View server から提示される SSL 証明書について、証明書確認モードを構成できます。[\[View Client の証明書チェック モード \(P. 27\)\]](#) を参照してください。

手順

- 1 ターミナル ウィンドウを開いて「**vmware-view**」と入力するか、または Ubuntu メニュー バーから [アプリケーション] - [インターネット] - [VMware View Client] を選択します。
- 2 必要に応じてサーバ名とポート番号を入力し、[続行] をクリックします。

view.company.com:1443 は、デフォルト以外のポートを使用した一例です。

- 3 RSA SecurID の認証情報または RADIUS の認証証明書の入力を求められた場合、ユーザー名とパスコードを入力して [続行] をクリックします。
- 4 ユーザー名とパスワードを入力し、ドメインを選択した後、[OK] をクリックします。

ログイン ダイアログ ボックスが表示される前に、確認する必要があることを知らせるメッセージが表示される場合があります。

- 5 デスクトップセキュリティ インジケータが赤に変わり、警告メッセージが表示されたら、プロンプトに応答します。
通常、この警告は View 接続サーバが証明書サムプリントをクライアントに送信しなかったことを示します。サムプリントは証明書公開鍵のハッシュであり、公開鍵を省略したものとして使用されます。View 接続サーバ 4.6.1、5.0.1 以降のバージョンは、サムプリント情報を送信しますが、以前のバージョンではこれを実行しません。
- 6 (オプション) 使用する表示プロトコルおよびウィンドウ サイズを選択します。

オプション	説明
表示プロトコル	デフォルトは、[PCoIP] です。代わりに Microsoft RDP を使用する場合、デスクトップ名の下にある [PCoIP] をクリックして切り替え、[Microsoft RDP] を選択します。
ウィンドウ サイズ	デフォルトは、[フル画面 - すべてのモニタ] です。他のウィンドウ サイズを選択するには、[大画面] や [カスタム サイズ] などのデスクトップ名の下にある他のオプションの 1 つをクリックします。

- 7 View デスクトップのショートカットをダブルクリックして、接続します。

接続した後、クライアント ウィンドウが表示されます。View Client がデスクトップに接続できない場合は、次の手順を実行します。

- View 接続サーバが SSL を使用しないように構成するかどうかを決定します。View Client は、SSL 接続を必要とします。View 管理者のグローバル設定で、[クライアント接続に SSL を使用する] チェック ボックスが選択されていないかどうかを確認します。このチェックボックスが選択されていない場合、チェックボックスを選択して SSL を使用する必要があります。または、HTTPS が有効なロード バランサや View 接続サーバへの HTTP 接続を作成するように構成されている他の中間デバイスにクライアントが接続できるように環境をセットアップする必要があります。
- View 接続サーバ用のセキュリティ証明書が正常に動作していることを確認します。正常に動作していない場合は、View 管理者で、デスクトップの View Agent が到達不能になる場合もあります。
- View 接続サーバ インスタンスで設定されているタグがこのユーザーからの接続を許可していることを確認します。[\[VMware View 管理者ガイド\]](#) を参照してください。
- ユーザーがこのデスクトップにアクセスする資格を付与されていることを確認します。[\[VMware View 管理者ガイド\]](#) を参照してください。

- RDP 表示プロトコルを使用して View デスクトップに接続している場合、クライアント コンピュータでリモート デスクトップ接続が許可されていることを確認します。

View Client の証明書チェック モード

管理者は、またときにはエンド ユーザーは、サーバの証明書チェックが失敗した場合にクライアント接続を拒否するかどうかを設定できます。

証明書確認は、View 接続サーバと View Client 間の SSL 接続に対して実行されます。証明書検査では、次のような検査が行われます。

- 証明書の目的は、送信側の ID 検証やサーバ通信の暗号化以外にあるか。つまり、証明書のタイプは正しいか。
- 証明書は期限切れになっているか、また有効なのは未来のみか。つまり、証明書はコンピュータの時刻に応じて有効になっているか。
- 証明書上の共通名は、それを送信するサーバのホスト名と一致しているか。ロード バランサが View Client をあるサーバにリダイレクトする際に、証明書が View Client に入力したホスト名と一致しない場合、不一致が発生する可能性があります。クライアントにホスト名ではなく IP アドレスを入力した場合でも、不一致の原因となる可能性があります。
- 不明なまたは信頼されていない証明機関 (CA) によって署名された証明書か。自己署名された証明書は、信頼されていない CA の証明書タイプの 1 つです。

チェックをパスするには、証明書のトラスト チェーンが、デバイスのローカル証明書ストアでルートになっている必要があります。

注意 ユーザーが Linux クライアント システムにインストールできる自己署名付ルート証明書を配布する手順については、Ubuntu のドキュメントを参照してください。

View Client は、クライアントシステムの `/etc/ssl/certs` ディレクトリに保存されている PEM 形式の証明書を使用します。この場所に保存されているルート証明書をインポートする手順については、<https://help.ubuntu.com/community/OpenSSL> のドキュメントに記載されている「Importing a Certificate into the System-Wide Certificate Authority Database (システム全体の証明機関データベースへの証明書のインポート)」というタイトルの手順を参照してください。

サーバ証明書を提示するほかに、バージョン 4.6.1 および 5.0.1 以降の View 接続サーバは View Client に証明書のサムプリントも送信します。サムプリントは証明書公開鍵のハッシュであり、公開鍵を省略したものとして使用されます。View server がサムプリントを送信しない場合、接続が信頼されていないことを知らせる警告が表示されます。

管理者が許可している場合、証明書確認モードを設定することができます。VMware View Client メニュー バーまたは View デスクトップ メニュー バーから [ファイル] - [環境設定] を選択します。選択肢は次の 3 つです。

- [信頼が確認されていないサーバには絶対に接続しない]。証明書の確認に失敗した場合、クライアントはサーバに接続できなくなります。失敗したチェックは、エラー メッセージに一覧表示されます。
- [信頼されていないサーバに接続する前に警告する]。サーバが自己署名証明書を使用していることが原因で、証明書の確認に失敗した場合、[続行] をクリックして警告を無視することができます。自己署名証明書の場合、証明書名は View Client に入力した View 接続サーバ名と一致する必要はありません。
- [サーバ ID 証明書を検証しない]。この設定は、証明書チェックは View によって一切実行されないことを意味します。

デスクトップの切り替え

デスクトップに接続している場合に、別のデスクトップに切り替えることができます。

手順

- ◆ 同じサーバ上、または異なるサーバから View デスクトップを選択します。

オプション	操作
同じサーバの異なる View デスクトップを選択する	[デスクトップ] - [切断] をメニューバーで選択します。
異なるサーバの View デスクトップを選択する	メニューバーから [ファイル] - [サーバから切断] を選択します。

デスクトップからのログオフまたは切断

ログオフせずに View デスクトップから切断すると、アプリケーションは開いたままになります。

View デスクトップに接続していないときに、最初に接続しなくてもログオフできます。この機能を使用すると、デスクトップに <Ctrl> + <Alt> + を送信してから [ログオフ] をクリックするのと同じ結果になります。

注意 Windows のキーの組み合わせ <Ctrl> + <Alt> + は、RDP 表示プロトコルを使用している場合に限り View デスクトップでサポートされます。PCoIP 表示プロトコルを使用する場合、<Ctrl> + <Alt> + を押す代わりに、メニューバーから [デスクトップ] - [Ctrl+Alt+Del の送信] を選択することもできます。

あるいは、<Ctrl> + <Alt> + <Insert> を押します。

手順

- ログオフせずに切断する。

オプション	操作
View Client も終了する	ウィンドウの隅にある [閉じる] ボタンをクリックするか、メニューバーの [ファイル] - [終了] を選択します。
同じサーバの異なる View デスクトップを選択する	[デスクトップ] - [切断] をメニューバーで選択します。
異なるサーバの View デスクトップを選択する	メニューバーから [ファイル] - [サーバから切断] を選択します。

注意 View 管理者は、切断された時点で自動的にログオフするようにデスクトップを設定できます。その場合、デスクトップで開いているプログラムは停止します。

- ログオフして切断する。

オプション	操作
デスクトップのオペレーティングシステムでメニューバーから	Windows の [スタート] メニューを使用してログオフします。 [デスクトップ] - [切断してログオフ] を選択します。 この手順を使用すると、初めに、View デスクトップで開いているファイルが保存されずに閉じられます。

- View デスクトップに接続していない場合にログオフする。
 - a デスクトップショートカットがあるホーム画面から、デスクトップを選択し、メニューバーから [デスクトップ] - [ログオフ] を選択します。
 - b 入力を要求されたら、View デスクトップにアクセスするための認証情報を入力します。

この手順を使用すると、初めに、View デスクトップで開いているファイルが保存されずに閉じられます。

デスクトップのロールバック

ロールバックは、Windows PC またはノートパソコン上のローカル モードでの使用のためにチェックアウトした仮想デスクトップに行った変更を廃棄することになります。

View 管理者がこの機能を利用でき、デスクトップがチェックアウトされている場合のみ、View デスクトップをロールバックできます。



注意 ローカル モードのデスクトップが変更され、ロールバック前に変更が View サーバにレプリケートされない場合は、変更は失われます。

開始する前に

- Active Directory ユーザー名とパスワード、RSA SecurID ユーザー名とパスコード、RADIUS 認証ユーザー名とパスコードなどのログインに必要な認証情報を取得します。
- データまたはファイルを保存するために、デスクトップをサーバにバックアップします。

View 管理者を使ってデータをサーバにレプリケートするか、ポリシーが許可する設定の場合、デスクトップが現在チェックアウトされている Windows クライアントのローカル モードで View Client を使用できます。

手順

- 1 View Client のホーム画面に [View 接続サーバ] プロンプトが表示されている場合、サーバ名を入力して、[続行] をクリックします。
 - a RSA SecurID の認証情報または RADIUS の認証証明書の入力を求められた場合、ユーザー名とパスコードを入力して [続行] をクリックします。
 - b ログイン ダイアログ ボックスでユーザー名とパスワードを入力します。
- 2 View デスクトップのショートカットを表示している View Client のホーム画面で、デスクトップを選択して、メニューバーから [デスクトップ] - [デスクトップのロールバック] を選択します。

View デスクトップがロールバックされた後、Linux クライアントからログインできます。

Linux システムでの Microsoft Windows デスクトップの使用

5

Linux 版 View Client では、Windows 版 View Client に搭載されている機能の一部がサポートされています。

この章では次のトピックについて説明します。

- [機能サポート一覧 \(P. 31\)](#)
- [国際化 \(P. 32\)](#)
- [キーボードとモニタ \(P. 32\)](#)
- [テキストのコピー アンド ペースト \(P. 33\)](#)

機能サポート一覧

Linux 版 View Client では、Windows 版 View Client のデスクトップやノート PC など、その他のクライアントで使用可能な機能の一部がサポートされています。

表 5-1. Linux クライアント用 Windows デスクトップでサポートされる機能

機能	Windows 7 の View デスクトップ	Windows Vista の View デスクトップ	Windows XP の View デスクトップ
RSA SecurID または RADIUS	○	○	○
シングル サインオン	○	○	○
RDP 表示プロトコル	○	○	○
PCoIP 表示プロトコル	○	○	○
USB アクセス			
Wyse MMR			
仮想印刷			
ロケーション ベースの印刷	○	○	○
スマート カード			
複数のモニタ	○	○	○
ローカル モード			

上記の機能の詳細および制限事項については、『VMware View アーキテクチャ プランニング ガイド』を参照してください。

注意 この機能サポート一覧は、VMware が Ubuntu 用に提供している Linux 版 View Client も対象としています。また、VMware のパートナー数社が、VMware View の展開用のシンクライアント デバイスを提供しています。各シンクライアント デバイスで使用可能な機能は、ベンダおよびモデルと、企業が採用する構成によって決定されます。シンクライアント デバイスのベンダおよびモデルの詳細については、VMware Web サイトから入手可能な『[VMware 互換性ガイド](#)』（英語版）を参照してください。

国際化

View Client のユーザー インターフェイスとドキュメントは、英語、日本語、フランス語、ドイツ語、簡体中国語、および韓国語で利用可能です。

Ubuntu 10.4 Linux クライアント システムを使用しており、英語以外の言語で View Client ユーザー インターフェイスを表示したい場合、UTF-8 エンコーディングを使用するロケールを使用できるようクライアント システムを設定する必要があります。

キーボードとモニタ

View デスクトップでは、複数のモニタとすべてのタイプのキーボードを使用できます。特定の設定を実行すると、最高のユーザー エクスペリエンスを実現できます。

複数のモニタを使用する場合のベストプラクティス

以下は、View デスクトップで複数のモニタを正しく使うための推奨事項です。

- 十分なビデオ RAM がある場合、最大 4 つまでのモニタを使用できます。

Ubuntu クライアント システムで 3 つ以上のモニタを使って View デスクトップを表示するには、`kernel.xhmmax` 設定を適切に構成する必要があります。次の公式を使用します。

$\text{<最高水平解像度> X <最高垂直解像度> X <モニタの最大数> X 4$

たとえば、`kernel.shmmax` を 65536000 に手動で設定すれば、2560x1600 の画面解像度で 4 つのモニタを使用できるようになります。

- View Client は、View Client の起動時に使用中のモニタ設定を使用します。モニタを風景からポートレート モードに変更したり、View Client が動作中にクライアント システムに追加モニタを接続する場合、View Client を再起動して新しいモニタ設定を使用する必要があります。

View Client は以下のモニタ設定をサポートします。

- 2 台のモニタを使用する場合、同じモードにする必要はありません。たとえば、外部モニタに接続されているノートパソコンを使用している場合、外部モニタはポートレート モードまたは風景モードにできます。
- 3 台以上のモニタを使用する場合、同じモードと同じ画面解像度にする必要があります。つまり、3 台のモニタを使用する場合、3 台すべてのモニタはポートレート モードまたは風景モードのどちらかにし、同じ画面解像度を使用する必要があります。
- 2 台のモニタを使用している場合に限り、モニタは、並べるか 2 つずつ重ねるか、または縦に重ねることができます。

画面解像度

画面解像度を設定する際は、以下のガイドラインを考慮に入れます。

- セカンダリ モニタ上で View デスクトップを開き、そのモニタ上で画面解像度を変更すると、View デスクトップはプライマリ モニタに移動します。
- PCoIP を使用すれば、2 台のモニタを使用する場合、モニタ毎に最大 2560x1600 の解像度で各モニタを個別に調節できます。2 台を超えるモニタを使用する場合、同じ画面解像度を使用する必要があります。

- RDP を使用して複数のモニタを使用する場合、各モニタの解像度は個別に調節できません。

キーボードの制限

ほとんどの場合、View デスクトップと物理コンピュータのいずれを使用しても、キーボードの動作は同じです。以下は、発生する可能性のある制限のリストです。ただし、周辺機器のタイプおよびクライアント システム上のソフトウェアにより異なります。

- マルチメディア キーボードのマルチメディア キーの一部が動作しない場合があります。たとえば、[Music] キーと [My Computer] キー は動作しない可能性があります。
- RDP を使用してデスクトップに接続し、Fluxbox ウィンドウ マネージャを使用している場合、View デスクトップでスクリーン セーバーが動作中であれば、一定のアイドル後、キーボードが動作を停止する可能性があります。

使用するウィンドウ マネージャに関係なく、VMware は View デスクトップではスクリーン セーバーをオフにして、スリープタイマーを指定しないことをお勧めします。

テキストのコピー アンド ペースト

クライアントシステムとリモート View デスクトップの間でテキストをコピー アンド ペーストできます。管理者がこの機能を有効にしていると、View デスクトップとクライアントシステムの間、または 2 つの View デスクトップの間でテキストをコピー アンド ペーストできます。制限事項がいくつか存在します。

PCoIP 表示プロトコルを使用し、View 5.x 以降の View デスクトップを使用している場合、View の管理者は、クライアントシステムから View デスクトップへ、または View デスクトップからクライアントシステムへのコピー アンド ペースト操作のみを許可するように設定できます。また、双方向のコピー アンド ペースト操作を許可したり、これらの操作を禁止したりすることもできます。

管理者は、View Agent を View デスクトップに関連付けるグループ ポリシー オブジェクト (GPO) を使用して、コピー アンド ペーストの機能を構成できます。詳細については、『VMware View の管理』マニュアルのポリシーの構成の章にある View PCoIP の一般的なセッション変数に関するトピックを参照してください。

プレーン テキストまたは書式付きテキストを、View Client と View デスクトップ間でコピーできますが、ペーストされたテキストはプレーン テキストになります。

グラフィックは、コピー アンド ペーストできません。また、View デスクトップとクライアントコンピュータのファイルシステムの間では、ファイルのコピー アンド ペーストはできません。

View Client のトラブルシューティング

View Client に関するほとんどの問題は、デスクトップのリセットまたは VMware View Client の再インストールで解決することができます。

この章では次のトピックについて説明します。

- [デスクトップのリセット \(P. 35\)](#)
- [View Client のアンインストール \(P. 35\)](#)

デスクトップのリセット

リセット操作を実行すると、デスクトップがシャットダウンおよび再起動されます。保存されていないデータは失われます。デスクトップオペレーティングシステムが応答しなくなった場合、デスクトップのリセットが必要となる場合があります。

View デスクトップをリセットする操作は、物理的な PC を強制的に再起動するためにその PC のリセット ボタンを押す操作に相当します。View デスクトップで開いているすべてのファイルが、保存されずに閉じられることとなります。

デスクトップをリセットできるのは、View 管理者がこの機能を有効にしている場合のみです。

手順

- ◆ [デスクトップのリセット] コマンドを使用します。

オプション	操作
デスクトップのオペレーティングシステムで	メニューバーから [デスクトップ] - [デスクトップのリセット] を選択します。
デスクトップショートカットがあるホーム画面から	デスクトップを選択し、メニューバーから [デスクトップ] - [デスクトップのリセット] を選択します。

View デスクトップのオペレーティングシステムが再起動されます。View Client がデスクトップから切断されます。

次に進む前に

システムが再起動するのを待ってから、View デスクトップへの接続を試行します。

View Client のアンインストール

View Client の問題を VMware View Client アプリケーションをアンインストールし、再インストールして解決できることがあります。

他のアプリケーションをアンインストールするのと同じ方法で、View Client をアンインストールします。

たとえば、[アプリケーション] - [Ubuntu Software Center] を選択し、[インストールされているソフトウェア] セクションで [vmware-view-client] を選択し、[削除] をクリックします。

アンインストールが完了すると、アプリケーションを再インストールできます。

[「Linux 版 View Client のインストール \(P. 9\)」](#) を参照してください。

Client で USB リダイレクトを設定

View Client 1.6 では、クライアントシステムの設定ファイルを使用して、どの USB デバイスが View デスクトップにリダイレクトできるかを指定できます。USB コンポーネントは、サードパーティのベンダーより提供される Linux 版 View Client のバージョンがある場合のみ使用可能です。

リモート デスクトップで View Agent、そしてローカルシステムで View Client の両方の USB ポリシを設定して、以下の目的を達成できます：

- View Client がリダイレクトで使用できる USB デバイスのタイプを制限します。
- View Agent を特定の USB デバイスがクライアント コンピュータからフォワードされないようにします。

重要 View Agent および View 接続サーバのバージョンが View 4.6.1 以降であるか、サードパーティ ベンダによって提供された View Client のバージョンがあれば、USB リダイレクト機能を使用できます。これらのトピックで説明されている USB フィルタリング機能は、View 接続サーバ 5.1 以降で使用できます。VMware シンククライアントおよびゼロクライアント パートナーについての詳細は、『[VMware 互換性ガイド](#)』を参照してください。

View Client 1.6 以降のサードパーティ ベンダで入手できる USB コンポーネントを使用するには、特定のファイルを指定場所にインストールし、View Client を起動する前に特定のプロセスを設定する必要があります。これらの詳細は、本書の対象範囲外です。

この章では次のトピックについて説明します。

- [USB 構成プロパティを設定 \(P. 37\)](#)
- [USB デバイス ファミリ \(P. 40\)](#)
- [View Client 1.5 コマンドライン オプションを使用して、USB デバイスをリダイレクト \(P. 41\)](#)

USB 構成プロパティを設定

複数の構成ファイルのいずれかで USB プロパティを設定できます。

- 1 `/etc/vmware/config`。vmware-view-usbd サービスは、最初にこのファイルを検証します。USB 構成プロパティがこのファイルに設定されている場合、それらのプロパティが使用されます。
- 2 `/usr/lib/vmware/config`。USB プロパティが `/etc/vmware/config` で見つからなければ、`/usr/lib/vmware/config` ファイルがチェックされます。
- 3 `~/.vmware/config`。USB プロパティが他のファイルで見つからなければ、`~/.vmware/config` ファイルがチェックされます。

以下の構文を使用して、構成ファイルでこれらのプロパティを設定します。

```
viewusb.<property1> = "<value1>"
```

注意 これらのプロパティを使用して、特定のタイプのデバイスをリダイレクトすることを許可します。フィルタリングプロパティも使用できるので、一部のデバイスを除外して、他のデバイスを含めることができます。Windows クライアントでは、コンポジットデバイスを分離するためのプロパティも使用できます。ただし、Linux クライアントでは、分離プロパティは現在使用できません。

一部の値では、USB デバイ스에 VID (vendor ID) および PID (product ID) が必要です。VID および PID を見つけるには、**vid** および **pid** と組み合わせられた製品名をインターネット検索できます。あるいは、View Client が動作中に USB デバイスをローカル システムに接続後に `/tmp/vmware-root/vmware-view-usb-*.log` ファイルを調べることができます。このファイルの場所を設定するには、`/etc/vmware/config` ファイルの `view-usb.log.fileName` プロパティを使用します。たとえば:

```
view-usb.log.fileName = "/tmp/usb.log"
```

重要 自動デバイスのリダイレクトについては、Ubuntu システムのカーネルバージョンが 3.2.0-27.43 以降であることを確認してください。Ubuntu 12.04 には、カーネルバージョン 3.2.0-27.43 が含まれます。このカーネルバージョンにアップグレードできない場合、代わりに自動デバイスへのホストのアクセスを無効にできます。たとえば、`"blacklistsnd-usb-audio"` 行を `/etc/modprobe.d/blacklist.conf` ファイルの最後に追加できます。システムがこれらの要件のいずれかを満たさない場合、View Client が自動デバイスのリダイレクトを試みるとクライアントシステムはクラッシュする可能性があります。デフォルトで、自動デバイスはリダイレクトされます。

表 7-1. USB リダイレクト用の構成プロパティ

ポリシー名とプロパティ	説明
オーディオ入力デバイスを許可する プロパティ: viewusb.AllowAudioIn	オーディオ入力デバイスのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 true と同じです。
オーディオ出力デバイスを許可する プロパティ: viewusb.AllowAudioOut	オーディオ出力デバイスのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 false と同じです。
HID を許可する プロパティ: viewusb.AllowHID	キーボードまたはマウス以外の入力デバイスのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 true と同じです。
HIDBootable を許可する プロパティ: viewusb.AllowHIDBootable	起動時 (または hid-bootable デバイスとしても知られる) に使用できるキーボードまたはマウス以外の入力デバイスのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 true と同じです。
デバイス記述子のフェイルセーフ機能を許可する プロパティ: viewusb.AllowDevDescFailsafe	View クライアントが config/device 記述子の取得に失敗してもデバイスのリダイレクトは許可されます。 config/desc が失敗してもデバイスを許可するには、 IncludeVidPid または IncludePath などの Include フィルタにそれを含まます。 デフォルト値は未定義で、 false と同じです。
キーボードおよびマウス デバイスを許可する プロパティ: viewusb.AllowKeyboardMouse	統合ポインティング デバイス (マウス、トラックボール、またはタッチパッドなど) のあるキーボードのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 false と同じです。
スマート カードを許可する プロパティ: viewusb.AllowSmartcard	スマート カードのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 false と同じです。
ビデオ デバイスを許可する プロパティ: viewusb.AllowVideo	ビデオ デバイスのリダイレクトを許可します。 デフォルト値は未定義で、 true と同じです。

表 7-1. USB リダイレクト用の構成プロパティ (続き)

ポリシー名とプロパティ	説明
リモート構成のダウンロードを無効にする プロパティ: viewusb.DisableRemoteConfig	USB デバイスのフィルタリングを実行する時に View Agent 設定の使用を無効にします。 デフォルト値は未定義で、 false と同じです。
すべてのデバイスを除外する プロパティ: viewusb.ExcludeAllDevices	すべての USB デバイスをリダイレクトから除外します。 true に設定されている場合、他のポリシー設定を使用して、固有のデバイスまたはデバイスのファミリーをリダイレクトすることができます。 false に設定されている場合、他のポリシー設定を使用して、固有のデバイスまたはデバイスのファミリーをリダイレクトしないようにすることができます。 View Agent で Exclude All Devices の値を true に設定し、この設定を View Client に渡すと、View Agent 設定は View Client 設定を無効にします。 デフォルト値は未定義で、 false と同じです。
デバイス ファミリーを除外する プロパティ: viewusb.ExcludeFamily	デバイスのファミリーをリダイレクトから除外します。設定のフォーマットは、 <family_name_1>[;<family_name_2>]... です。 例: bluetooth;smart-card デフォルト値は未定義です。
Vid/Pid デバイスを除外する プロパティ: viewusb.ExcludeVidPid	指定されたベンダおよび製品 ID のデバイスをリダイレクトから除外します。設定のフォーマットは、 vid-<xxx1>_pid-<yyy2>[;vid-<xxx2>_pid-<yyy2>]... です。 16 進数で ID 番号を指定する必要があります。ワイルドカード文字 (*) を ID の個々の数値の代わりに使用できます。 例: vid-0781_pid-****;vid-0561_pid-554c デフォルト値は未定義です。
パスを除外する プロパティ: viewusb.ExcludePath	指定されたハブまたはポートのパスにあるデバイスをリダイレクトから除外します。設定のフォーマットは、 bus-<x1>[/<y1>]..._port-<z1>[;bus-<x2>[/<y2>]..._port-<z2>]... です。 16 進数でバスおよびポート番号を指定する必要があります。パスにはワイルドカード文字を使用できません。 例: bus-1/2/3_port-02;bus-1/1/1/4_port-ff デフォルト値は未定義です。
デバイス ファミリーを含める プロパティ: viewusb.IncludeFamily	リダイレクトできるデバイスのファミリーを含めます。設定のフォーマットは、 <family_name_1>[;<family_name_2>]... です。 例: storage デフォルト値は未定義です。
パスを含める プロパティ: viewusb.IncludePath	リダイレクトできる指定のハブまたはポートのパスでデバイスを含めます。設定のフォーマットは、 bus-<x1>[/<y1>]..._port-<z1>[;bus-<x2>[/<y2>]..._port-<z2>]... です。 16 進数でバスおよびポート番号を指定する必要があります。パスにはワイルドカード文字を使用できません。 例: bus-1/2_port-02;bus-1/7/1/4_port-0f デフォルト値は未定義です。
Vid/Pid デバイスを含める プロパティ: viewusb.IncludeVidPid	リダイレクトできる指定されたベンダおよび製品 ID のデバイスを含めます。設定のフォーマットは、 vid-<xxx1>_pid-<yyy2>[;vid-<xxx2>_pid-<yyy2>]... です。 16 進数で ID 番号を指定する必要があります。ワイルドカード文字 (*) を ID の個々の数値の代わりに使用できます。 例: vid-0561_pid-554c デフォルト値は未定義です。

USB デバイス ファミリ

View Client または View Agent の USB フィルタリング規則を作成する場合にファミリを指定できます。

表 7-2. USB デバイス ファミリ

デバイス ファミリ名	説明
audio	すべてのオーディオ入力またはオーディオ出力デバイス。
audio-in	マイクロフォンなどのオーディオ入力デバイス。
audio-out	ラウドスピーカーおよびヘッドホンなどのオーディオ出力デバイス。
bluetooth	Bluetooth に接続されたデバイス。
comm	モデムおよび有線ネットワーク アダプタなどの通信デバイス。
hid	キーボードおよびポインティング デバイスを除くヒューマン インターフェイス デバイス。
hid-bootable	キーボードおよびポインティング デバイスを除く、起動時に使用できるヒューマン インターフェイス デバイス。
imaging	スキャナなどの画像デバイス。
keyboard	キーボード デバイス。
mouse	マウスなどのポインティング デバイス。
other	ファミリが指定されていません。
pda	携帯情報端末。
physical	カフィードバック ジョイスティックなどのカフィードバック デバイス。
printer	印刷デバイス。
security	指紋読み取りなどのセキュリティ デバイス。
smart-card	スマート カード デバイス。
storage	フラッシュ ドライブおよび外部ハードディスク ドライブなどの大容量ストレージ デバイス。
unknown	ファミリが不明です。
vendor	ベンダ固有の機能のあるデバイス。
video	ビデオ入力デバイス。
wireless	無線ネットワーク アダプタ。
wusb	無線 USB デバイス。

注意 View 5.1 以前のリリースでは、Windows 版 View Client は、クライアント コンピュータにインストールされたデバイス ドライバからデバイス ファミリを読み取ります。View 5.1 では、Windows クライアント コンピュータにデバイス ドライバをインストールする必要はありません。View Client は、デバイス ドライバからではなく、デバイス自体からデバイス ファミリを読み取ります。すべてのデバイスがファミリの正しい値を指定しませんが、USB デバイスのファミルウェアは通常、意図する機能を説明するデバイスのファミリを定義します。

Linux ベースのシン クライアントは常にデバイス自体からデバイス ファミリを読み取ります。

View Client 1.5 コマンドライン オプションを使用して、USB デバイスをリダイレクト

`vmware-view` コマンドの `--usb=` コマンドライン オプションを使用して、View デスクトップにリダイレクトできる USB デバイスを構成できます。USB コマンドライン オプションは、サードパーティのベンダより提供される Linux 版 View Client のバージョンおよび View Client 1.5 がある場合のみ使用可能です。

重要 View Client 1.6 以降を持っている場合、`--usb=` コマンドライン オプションではなく、構成ファイルを使用して、USB リダイレクトを構成する必要があります。第7章「[Client で USB リダイレクトを設定 \(P. 37\)](#)」を参照してください。

`--usb=` オプションに対する引数が USB リダイレクト コマンド `vmware-view-usb` に送られます。

以下の例では、トレースレベルのログ処理をオンにしています：

```
vmware-view --usb=log:trace
```

設定する各 `vmware-view-usb` オプション用の `--usb` オプションの複数のインスタンスを指定できます。以下の例では、デバッグレベルのログ処理をオンにして以下により指定されたデバイスを除外します ID：

```
vmware-view --usb=log:debug
--usb=exid:vid0012pid0034
```

以下の表には、`--usb` オプションで使用可能な引数が一覧表示されています。

表 7-3. USB リダイレクト オプション

オプション	説明
<code>disable-boot-fwd</code>	View USB クライアントによるブート デバイスの検出とフィルタリングを無効にします。このオプションを指定すると、クライアント システムのブート元を含む全 USB デバイスが転送されることとなります。
<code>ex:<device1>[,<device2>]...</code>	転送されるものから指定したデバイスのリストを除外します。例： <pre>vmware-view --usb=ex:"flash 1"</pre>
<code>exfa:<device-family1>[,<device-family2>]...</code>	転送されるものから指定したデバイス ファミリのリストを除外します。例： <pre>vmware-view --usb=exfa:storage</pre>
<code>exid:<device-ID1>[,<device-ID2>]...</code>	転送されるものから指定したデバイスのリストを除外します、この場合デバイスはベンダーの 16 進数の値とフォーマット <code>vid<xxxx>pid<xxxx></code> を使用している製品 ID により指定されます。例： <pre>vmware-view --usb=exid:vid1e2fpid5a1e</pre>
<code>expt:<device-path1>[,<device-path2>]...</code>	転送されるものからデバイスのリストを除外します、この場合デバイスはバスの 10 進法の値とフォーマット <code>bus<n>port<n></code> を使用しているポートの値により指定されます。例： <pre>vmware-view --usb=expt:bus1port4,bus5port3</pre>
<code>in:<device1>[,<device2>]...</code>	転送される指定のデバイスのリストを含めます。例： <pre>vmware-view --usb=in:"flash 1"</pre>
<code>infa:<device-family1>[,<device-family2>]...</code>	転送される指定のデバイス ファミリのリストを含めます。例： <pre>vmware-view --usb=infa:storage</pre>
<code>inid:<device-ID1>[,<device-ID2>]...</code>	転送されるデバイスのリストを含めます、この場合デバイスはベンダーの 16 進法の値とフォーマット <code>vid<xxxx>pid<xxxx></code> を使用している製品 ID により指定されます。例： <pre>vmware-view --usb=inid:vid27f8pid2a1b</pre>

表 7-3. USB リダイレクト オプション (続き)

オプション	説明
<code>inpt:<device-path1>[,<device-path2>]...</code>	転送されるデバイスのリストを含めます、この場合デバイスはバスの 10 進法の値とフォーマット <code>bus<n>port<n></code> を使用しているポートの値により指定されます。例: <code>vmware-view</code> <code>--usb=inpt:bus3port1,bus4port2</code>
<code>log:{debug error info trace}</code>	以下のログ処理レベルを指定します。 <code>vmware-view-usb:trace</code> 、 <code>debug</code> 、 <code>info</code> (デフォルト)、または <code>error</code> (詳細が少ない順に)。ログ ファイル (<code>backendLog.txt</code>) は、 <code>/tmp/vmware- <username>/vmware-view-usb- <pid>.log</code> に書き込まれます。例: <code>vmware-view</code> <code>--usb=log:error</code>

デバイスを含めるまたは除外する優先順位は以下のように、すなわち高から低になります。

- 1 `expt` (バスとポートにより指定されるデバイスを除外します)
- 2 `inpt` (バスとポートにより指定されるデバイスを含めます)
- 3 `ex` (指定したデバイスのリストを除外します)
- 4 `in` (指定したデバイスのリストを含めます)
- 5 `exid` (ベンダーと製品 ID により指定されるデバイスを除外します)
- 6 `inid` (ベンダーと製品 ID により指定されるデバイスを含めます)
- 7 `exfa` (指定したデバイス ファミリのリストを除外します)
- 8 `infa` (指定したデバイス ファミリのリストを含めます)

以下の例は、ID で指定されるひとつのデバイスから切り離すすべてのストレージ ファミリ デバイスを除外します：

```
vmware-view --usb=exfa:storage
--usb=inid:vid1812pid1492
```

以下は `infa` および `exfa` オプションで使用できる USB デバイス ファミリ クラスのリストです。

audio	printer
bluetooth	security
comm	smart-card
hid	storage
hid-bootable	unknown
hub	vendor
imaging	video
other	wireless
pda	wusb
physical	

インデックス

記号

View デスクトップ、ロールバック 29

View デスクトップのロールバック 29
デスクトップ
 ロールバック 29
 リセット 35

C

Canonical 9

Ctrl+Alt+Delete 28

Ctrl+Alt+Del メニューコマンド/ソウシン 28

F

FIPS モード 22

L

Linux、View Client のインストール 7

P

PCoIP クライアント イメージ キャッシュ 23

S

SSL 証明書、検証する 22

U

Ubuntu 9

UPN、View Client 25

URI (uniform resource identifiers) 11

URI の例 14

USB デバイスの転送 37,41

USB デバイス ファミリ 40

USB リダイレクト 37,41

V

View Agent、インストール要件 8

Linux 版 View Client、インストール 9

View Client のアンインストール 35

View Client 用の URI 構文 12

View Client

 Linux 版のシステム要件 7

 インストール 7

 起動 25

 構成 11

 システム要件 7

 デスクトップから切断 28

 トラブルシューティング 35

View 接続サーバ 8

View デスクトップから切断 28

View デスクトップへログイン 25

vmware-view コマンドライン インターフェイス 15,
16

W

Windows デスクトップ 31

い

イメージ キャッシュ、クライアント 23

インストール手順 9

お

オペレーティング システム、View Agent でサポート
されている 8

か

画面解像度 32

き

キーボード 32

機能サポート マトリックス、Linux 版 31

キャッシング、クライアントサイド イメージ 23

く

クライアントイメージ キャッシュ 23

クライアント デバイスの前提条件 8

こ

構成プロパティ 15,16

国際化 32

コマンドライン インターフェイス 16

さ

サーバ証明書検証 22

サーバ接続 25

し

システム要件、の使用 7

証明書、問題の無視 22,27

証明書確認の検証モード 22

せ

セキュリティ サーバ 8

て

テキスト、コピー 33

テキストのコピー 33

テキストのペースト 33

デスクトップ

切り替え 28

ログオフ 28

デスクトップの切り替え 28

デスクトップのリセット 35

デバイス、USB 37,41

デバイス ファミリ 40

と

トラブルシューティング 35

は

ハードウェア要件、Linux システム版 7

ふ

プロキシ設定 16

も

モニタ 32

り

リダイレクト、USB 37,41

ろ

ログ、USB デバイス用 37,41

ログオフ 28